

いのちからいのちへ

[エゼキエル書 37 章 1～6、11～14 節]

「主の手がわたしの上に臨んだ。わたしは主の霊によって連れ出され、ある谷の真ん中に降ろされた。そこは骨でいっぱいであった。主はわたしに、その周囲を歩き巡らせた。見ると、谷の上には非常に多くの骨があり、また見ると、それらは甚だしく枯れていた。そのとき、主はわたしに言われた。「人の子よ、これらの骨は生き返ることができるか。」わたしは答えた。「主なる神よ、あなたのみがご存じです。」そこで、主はわたしに言われた。「これらの骨に向かって預言し、彼らに言いなさい。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。これらの骨に向かって、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。わたしは、お前たちの上に筋をおき、肉を付け、皮膚で覆い、霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。そして、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。」

主はわたしに言われた。「人の子よ、これらの骨はイスラエルの全家である。彼らは言っている。『我々の骨は枯れた。我々の望みはうせ、我々は滅びる』と。それゆえ、預言して彼らに語りなさい。主なる神はこう言われる。わたしはお前たちの墓を開く。わが民よ、わたしはお前たちを墓から引き上げ、イスラエルの地へ連れて行く。わたしが墓を開いて、お前たちを墓から引き上げるとき、わが民よ、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。また、わたしがお前たちの中に霊を吹き込むと、お前たちは生きる。わたしはお前たちを自分の土地に住ませる。そのとき、お前たちは主であるわたしがこれを語り、行ったことを知るようになる」と主は言われる。」

[1] バビロン捕囚の時代の真只中で

今日の箇所は預言者エゼキエルが見た「枯骨の幻」とか「枯れた骨の復活」と言われる有名な箇所です。見方によってはちょっとグロテスクに思える箇所かもしれないと思います。しかし、聖書はどの所もそうだと言えると思いますが、「ここで語られていることは自分のことだ」と捉えることが出来る時、その言葉が、素晴らしい喜びの知らせ（福音）として響いて聞こえてくるのです。

いや、これはマンガチックな、荒唐無稽なお話にすぎない。こんなことを信じるなんて、何てお目出たいことかと仰る方もいるかもしれません。しかし、これはリアリティがない話かというのと、逆に、これ以上ないリアルな物語であるとも言えると思います。徹底した「死」の描写がここにあります。そしてここで語られ

ていることは結論から言ってしまうと、**死んでしまった存在が復活するのだ**という、**人間存在に対する神様のわざ**が語られているのですね。それを、預言者エゼキエルは、イスラエル民族の最も大きな試練の時代、「バビロン捕囚」の時代の真只中で、幻の内に、神様によって見せられたのです。

それは神様は“あなた方を見捨ててはいない、人間的には絶望かも知れない、希望を持つことなどかえって空しく思えるかもしれない、周りの人々は「見よ、この有様を。神などいないではないか」と言うかもしれない、けれどもわたしは生きている。必ず事を為すのだ”ということがここに示されていると思います。

しかし神様は、まず人間に、**己れの現実**を直視させます。エゼキエルは神様に、ある谷に連れ出されると、そこには**死者の骨が累々と横たわっていた**とあります。目を覆いたくなる風景です。しかもその骨は**甚だしく枯れていた**と言うのですね。時間が経っているのです。以前、地上を生き生きと生活した者たちの姿はそこには全くなく、誰が誰かも分からない。しかもこの骨は自然に死んでいった者たちと言うよりも、9節には「**これらの殺されたもの**」とあります。こんなに惨いことはありません。しかし、神様はこの光景をエゼキエルに見せます。何故でしょうか。

11節で、主はこう語られました。

—「主はわたしに言われた。「人の子よ、これらの骨はイスラエルの全家である。彼らは言っている。『我々の骨は枯れた。我々の望みはうせ、我々は滅びる』と。

エゼキエルが見せられたのは、**信仰共同体であった筈のイスラエルの現実**です。イスラエルは**今いのちを全く失って、骨と化している**というのです。その理由はと言えば、自らで転んだのです。あの「放蕩息子の譬え」(ルカ 15章)と同じですね。まことの天の父など要らぬと言って神を捨て、その果てに孤独となり食物にも困ってしまいました。あの放蕩息子は我に返ってボロボロになって帰ってきましたが、もし帰れなかったらそのまま果ててしまったでしょう。『我々の骨は枯れた。我々の望みはうせ、我々は滅びる』という言葉はそういうことでしょう。

[2] 枯れた骨に向かって命じることが出来る方がある！

しかし、そのあとの12節にある「**それゆえ**」というのが偉大な言葉だと思えます。「**それゆえ、預言して彼らに語りなさい。**」とされています。本当は「それゆえ」であったなら、ダメ息子は見離されてもおかしくない。自ら主なる神様を捨てたのですから。いのちの源を自分から断ち切ったのですから。聖書の語る「罪」とはそういうことですね。「死んだ骨」というのは、その姿なのです。

「**それゆえ、預言して彼らに語りなさい**」。エゼキエルに語られた預言の言葉とは

は驚くべき内容です。12 節以下には「墓から引き上げる」という表現がありますが、少し遡って 4 節以下にはこうありました。「これらの骨に向かって預言し、彼らに言いなさい。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。これらの骨に向かって、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。わたしは、お前たちの上に筋をおき、肉を付け、皮膚で覆い、霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。そして、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。」

「枯れた骨よ、主の言葉を聞け。」と言うのですね。いのちのない、死んだ骨ですよ。その骨よ、聞け、と言うのですから、滑稽ですらあります。正気の沙汰ではありませんね。けれどもどうでしょう。見方を変えてみましょう。主なる神様は、枯れ果てた骨に呼びかけることがお出来になる方だということではないでしょうか。重なりあう骨の一つ一つの中に、「人格」を見出し、語りかけるのです。私はここに、途方もない神様のご愛があることを思わないではられません。捨てられてしまったような骨も、そこにいのちの片鱗が残されているのです。災害で亡くなった方の遺骨が見つかる、とても悲しいけれども遺族は喜ぶますね。その骨には何十年も生きて来た愛する者の DNA がちゃんと残されていますから、たとえ骨でも、その人の笑顔を、声を、振る舞いを想起することが出来ます。エゼキエルの時代などは当然 DNA のことなど知る由もなかった訳ですが、神様は、その骨に、その人の人格を見出し、「再び生きよ」と言って下さるといいます。これは、変な言い方かもしれませんが、究極の優しさだと私は思いました。優しさです。あなたがいないと私は悲しいのだ、と。そのように思い、死んでしまったこのいのちを呼び起こしてくれる存在が私たちにはある、ということです！

「これらの骨に向かって、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。わたしは、お前たちの上に筋をおき、肉を付け、皮膚で覆い、霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。」

ある人は、エゼキエルは祭司として、動物の生贄を献げてもいたので、解剖学の知識もあり、それがここにも反映しているのだろうと言います。とてもリアルです。この骨が神の声を聞くと、筋が回復し、肉がよみがえり、それを皮膚が覆うと言うのです。しかしそれだけなら他の生き物と一緒にです。神様はこの骨に、「霊を吹き込む」と言います。14 節にもありますね。「また、わたしがお前たちの中に霊を吹き込むと、お前たちは生きる。」あの創世記を思い起こします。「主なる神は、人に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きるものとなった」(2:7)。そうです、ここで起こっていることは、いのちの新しい賦与です。「死からいのち」と言うよりも、神様は、一度いのちを与えた人間を滅ぼしたくなく、たとえ肉体的には様々な理由で朽ちることがあっても、その人固有のいのちは終らない、いやも

っとハッキリと神様と共にあるいのちの中に導かれるのだ、あなたは決して神様から見捨てられてはいない、「いのち」から「いのち」へ移されるのだよ、神様は人間を失いたくない。これこそ究極の愛であり、優しさですよ。

[3] 信仰共同体への神の励まし—聖霊と復活の信仰

今日の箇所面白いのは、これが信仰共同体の事柄としても預言されていることです。10節ですが「わたしは命じられたように預言した。すると、霊が彼らの中に入り、彼らは生き返って自分の足で立った。彼らは非常に大きな集団となった」とあります。一人ではなく“群れ”、“共同体”の再生を聖書は預言しています。

現代アメリカの神学者W・ブルッゲマンは、近著『聖書は語りかける』の中で、「教会はかつて死んでいたけれども、今は生きている者たちから成っています」と記しました。私はこれはとても大事な言葉だと思ったのです。「あなたはかつては死んでいたけれども、キリストによってもう一度あなたの人生を生きるように呼び出されている。神と共に生きている。教会とはそのような者たちの群れなのだ」と言っていると思います。皆さんお一人おひとりにその物語があるでしょう。そのことを本当に大事にして、聖霊がいつも上を向かせて下さることに信頼してゆきたいと思います。

こんなエピソードがあります。あの第二次大戦の時、その終結の一年目の1944年、ドイツのドルトムントの地域が一面爆撃を受け、その瓦礫の中で、一握りの教会の群れが聖霊降臨日の礼拝に集まったと言います。その教会の、当時のナチスとも戦ったハンス・ヨアヒム・イーヴァント牧師はこのエゼキエル書 37章の御言葉を説教されたのだそうです。その中でこのような言葉が残されています。「神はいないと叫び続ける大波のような神に敵対する霊、下から来る霊に対し、われわれは上より来る霊、いのちと規律と真理の霊によって、心を一つにし、声を合わせて、われらの主である神への賛美を響き渡らせよう」。

何と勇気づけられる言葉でしょうか！ このことを言わせるのは、人間を超えた聖霊、神の愛の霊の力を信じている故ですね。そして、「キリストの復活」に私たちがあずかるのだという約束を信じているからだということは疑いの余地はありません。私たちは「いのちからいのち」へと導かれているのです！ 私たちを造られた神はどこまでも責任を負って下さるのです。こんな枯れた骨のような存在ですが、私たちは主イエスの十字架によって神様にゆるされ、抱かれています。その信仰を失うことがありませんように。私たちの人生も、私たちのこの教会も。今、この時代の中でこそ新しく響いてくる言葉だと思いました。

お祈り致します。